

資料紹介 『五十三次錦繪艸紙』

Gojūsan-tsugi nishiki-e zōshi transcribed, with a short introduction

岩田 秀行

IWATA Hiroyuki

要旨

江戸期の小説、浮世絵、歌舞伎は、相互に関わり合いを持ち展開するが、江戸後期において「五十三次」ものは、そうしたなかでも一大テーマを形成している。そうした三者の関わり合いが読み取れる資料として、従来未紹介の『五十三次錦繪艸紙』（東京大学総合図書館蔵）を採り上げ、その内容について紹介する。

一 『五十三次錦繪艸紙』について

十返舎一九の『道中膝栗毛』に端を発する、五十三次を題材とした文芸は、やがて浮世絵にも広がり、歌川広重保栄堂板「東海道五拾三次」(天保六年頃)を頂点として、多くの絵師が東海道の風景を続き物に描いている。^①

天保の改革以降になると、単に風景画としてだけではなく、風景を種々の他の物と対置させる趣向の揃物が出現する。広重の保栄堂板を背景に、前面に美人を配した国貞画「東海道五十三次」(天保七年頃)は早い例であるが、三代豊国・国芳・広重の「東海道五十三対」(弘化頃)、三代豊国と広重合作の「雙筆五十三次」(安政元〜四年)は、それぞれの宿駅とそれに関わる事物との取り合わせを試みている。中でも、嘉永五年に出版された三代豊国の「東海道五十三次」(目録題は「役者東海道五十三驛」、以下通称「役者東海道」と呼ぶ)は、豊国得意の役者大首絵と東海道の宿駅を結びつけた趣向で、「岡崎驛 政右衛門」が、七千枚を摺った『浮世絵師歌川列伝』と言われることから大人気が察しられる。当時人気の揃物は、やがて双六等にも仕組まれ、両者相俟つて、さらに売れ行きに拍車を掛けたものであるが、この「役者東海道」の場合は、さらに歌舞伎仕立ての草双紙にもなっている。本稿で紹介する一寿齋国貞(二代国貞)画、並木五瓶(三代五瓶)作『五十三次錦繪艸紙』(嘉永六年)がそれである。

歌舞伎にも、五十三次ものが生まれており、「ひとりたびにじゅうさんご獨道中五十三驛」(文政十

年)、「うめのはるにじゅうさんご梅初春五十三驛」(天保六年)、「おのえきごろうだいばなし尾上梅壽一代噺」(弘化四年、

並木五瓶作)が本作に先立っている。一つ一つ独立の宿駅を、筋立てに拠つて結びつけ、東下りの流れとするものである。本作は、序文にも言うように、三代目菊五郎の「梅初春五十三驛」の趣向を借り、木曾義仲の忘れ形見、清水冠者義高が様々に身をやつして、東海道を上り、頼朝に仇をなさんとする筋立てとなっている。それぞれの宿駅において、三代豊国の「役者東海道」の人物になりすます趣向ではあるが、役者絵ファンにとつては、見覚えた「役者東海道」が、どのようにしてそこに現れるかということがひとつの面白みともなっているものである。したがって、「役者東海道」の登場人物に関しての情報が盛り込まれていることにもなる。もつとも、「役者東海道」と版元も違い、そのための配慮もあつてか、現在分かっている「役者東海道」には、現れぬ人物を配すところもあり、それなりの独自性を持たせたいという配慮も感じられる。あるいは、また以前からの構想があつたものかもしれない。

構成としては、「役者東海道」に倣うため、歌舞伎の五十三次ものとは逆に、東海道を上る形式となっている。最後、この狂言が終わつた後に半丁を費やして、京四条芝居打出後の木戸口を描く(廿七丁裏)。おたふくの面を被つた木戸番は、江戸の芝居小屋では見受けられぬもので、これは上方の芝居小屋の「鍛打」と呼ばれるものである(『戯場節用集』八丁表(享和元年)に図あり)^②。したがって、劇中の主人公が京上りを果たした後、以上の狂言を見た京の観客が芝居の終演後に小屋から出てくる場面を描いて全体を締めくくる面白い構成としていふこととなる。こ

うした意味では、一種の架空の正本写し合巻とも呼ぶうるもので、役者絵、歌舞伎、文芸作品の三つが密接に関わりあつて、成立している興味深い作品といふことができよう。

二 底本書誌、および翻字要領

書誌等

底本 東京大学総合図書館蔵本 (E24/159, B1255)。合巻形式摺附け表紙中本三冊。底本は、摺附け表紙が続くように、中巻・下巻の表紙を最初に置き、冒頭に袋を付けて、さらに鞘表紙を付けて一冊に改装したもの。見返しは、上巻見返しを下巻表紙の裏に、中巻見返しを中巻表紙の前に付け直して残す。また、裏表紙は、下巻裏表紙のみを上下逆に最後に綴じて残す。不明箇所等は、東京女子大学図書館蔵本 (B913: 645-61) を参照した。

上巻、一丁〜十丁。中巻、十一丁〜十九丁。下巻、二十丁〜廿七丁。ただし、一丁表は序文、一丁裏〜三丁表は繡像口絵。三丁裏より廿七丁表まで本文。ただし、廿五丁裏・廿六丁表は挿絵のみ、また廿七丁裏は、芝居打出し後の木戸口を描く。

印記 寄贈印、「寄贈、大正十三年五月十三日、高英二郎氏（袋）印、「明治五改」（一丁表）、「東京帝國大學圖書印」（裏表紙）。

書名 「五十三次錦繪艸紙」（袋、中巻表紙、上巻見返し）。「五十三驛錦繪艸紙」（中巻見返し）。「五十三驛錦繪草紙」（下巻見返し）。

刊年 嘉永六年（序文「嘉永六癸丑春新版」、下巻見返し「嘉永六癸丑春新刻」、廿七丁裏「癸丑初春しん板」、中巻見返し「癸丑春發市」。改印は、「子十」「福」「村松」（一丁表、十一丁表、二十丁表）。嘉永五年十月に改めを受け、六年春新版としたもの。ただし、奥付けの刊記は、「嘉永壬子初春新版」とある。この「五」および「春」は入木。広告書目の「濡乾茜逢傘」「仮名文章女節用」は嘉永四年の新版、「鶯塚梅赤本」三、四、五編のうち、五編は、嘉永五年の新版であるため、この裏表紙は、嘉永四年までのものを再利用した嘉永五年用のもの。内容から、嘉永五年春の出版はあり得ないため、既存裏表紙の流用であろう。

作者 二代歌川国貞（上巻表紙・上巻見返し「一壽齋國貞画」、袋・十丁裏・中巻見返し・十九丁裏・下巻見返し・廿七丁裏「国貞画」、歌川晴重（中巻見返し・下巻見返し「晴重画」）、三代並木五瓶（下巻表紙・上巻見返し「並木五瓶作」、序文「浅草堂並木述」、袋・廿七丁裏「並木作」、十丁裏・中巻見返し・十九丁裏・下巻見返し「五瓶作」）。

板元 三河屋鉄五郎（奥附「三河屋鉄五郎板」、中巻見返し・下巻見返し「三鉄寿梓」、二十七丁裏「三鉄」）

翻字要領

○ 漢字は、原字に相当する字体が文字コードに複数存在する場合は、もつとも字形の近いものを採用した。

○ 平仮名は、通行の字体にあらためた。しかしながら、「八」を字母とする「は」字のうち、助詞の「は」「ば」のみは、意味のくみ取りやすさを考え、カタカナの「ハ」「バ」を宛ててこれを残した。

○ 文字遣いは原本どおりとし、仮名に漢字を当てたり、濁点を附したりの校訂は行わなかった。

○ 意味の区切りごとに、半角のスペースを置いた。

○ 誤字・脱字、また注記等は、() により、本文中また当該文字の右側に、補ったり付註したりした。

○ 頁、または見開きの最初ごとに、() によって、(上巻・見返し)

(二丁裏・二丁表) 等とその文字の書かれている部分を示した。

○ 本文がつながることを示す、「▲」「△」「▼」等の二つの合印は、その一つだけを残した。

内容量が多いため、まず本文のみの紹介に留め、本文や絵についての分析等は稿を改めたい。

三 翻字

(袋)

五十三次錦繪艸紙

並木作

国貞画

全三冊

(表紙)

一壽齋國貞画

初編上

五十三次錦繪艸紙

初編中

並木五瓶作

初編下

(上巻見返し)

五十三次錦繪艸紙

一壽齋國貞画

並木五瓶作

初編上

(中巻見返し)

三鉄寿梓

五瓶作

國貞画

五十三次錦繪艸紙

癸丑春發市

晴重画

中之巻

(下巻見返し、東京女子大学図書館蔵本による)

五瓶作 晴重画 三鉄寿梓

國貞画

五十三驛錦絵草紙 下之巻

嘉永六癸丑春新刻

(一丁表)

とりなくあつま めいぶつにしきえ うたがへ なが たへ すすひろ はびこ ねんく
 鶏が啼東の名物錦繪ハ歌川の流れ絶ず未廣く蔓り年々
 さいくはなあいに たうじうきよえ かいさんくわんそとよくに おこ たうせい
 歳々花相似たり當時浮世繪の開山元祖豊國に発り當世ハ
 かめあど おやだまもつは さかさか しが たうじりうかう つぎえどちう
 亀井戸の親玉専ら盛んに然も當時流行の五十三次江戸中に
 ひやうばん さんてくまでひよ はんもと いそが かひて もんぜん いち
 評判して遠國迄響き板元の 鬧しき買人ハ門前に市を聞
 にどめ さんてつ さんてつ さんてつ ものにしきうし
 二度目をまたも三鉄が画に合せたる續き物錦 双紙といふ
 つつ あへ ね ぐさばいじゆおう つぎ よしたか さまぐ
 綴り合した根なし草梅壽翁の五十三驛に義高が種々に
 すがた かへ しめかう せい しめかう ははる かわら
 容を變たる趣向にもとづき會言附た 戲 譚も初春のお笑ひ
 すななが うし とし ほまれふではじめ しんはん
 ぐさ末長き丑の年の 誉筆初の 新板となし 諸君方の
 ももめごらん ほど こひねが
 御求御覽の程を 希ふ

嘉永六癸丑春新板

浅草堂並木述

(一丁裏・二丁表)

ちからもち うへさ たか きやうばし こまん
 力持の噂に高き京橋の小万
 ほんちやういとや こひむこおまつり さしち
 本町糸屋の戀賀於祭の佐七
 にほんばし さかなうりうで きさふらう
 日本橋の肴賣腕の喜三郎

(二丁裏・三丁表)

俠客幡隨院の長兵衛

鈴が森にて権八に逢て身の上を引受頼まれる

大江の家臣白井権八

(三丁裏・四丁表)

ころハげんりやくのはじめきそのよしなか あはづにてうちじになしけ
 るゆへちやくししみづのくわんじやよしたか ほんごくをたちのきら
 うにんのすがたになりくわんとうへおもむくそのころ よりともハか
 まくらにあつてむさしのくに あさくさでらのくわんおんを しんじて
 ほんどうをこんりうして 日ごとのさんけいにて ゑどのはんぜう かま
 くらにひとしく にほんばしのさかないち じんじやぶつかくのぎはひ
 ふでにもかきつくしがたし しみづのくわんじやよしたか よりともをう
 たんと かまくらへおもむき 大江いなばの介のけらいとなり 白井ごん
 八と名をかへいたりしに おなじかちうに ほんぜう助太夫といふ ぐん
 がくしはんのさむらひありしが この助太夫がいへに ぐんがくのひしよ
 しんめうけんとなづけし一チくわんをつねぐのぞみしが あるよひそ
 かに かががたくへゆきて なにとぞしんめうけんを見せてくれとのぞみ
 しゆへ 助太夫 大きにはらたて ぐん八をはぢしめければ ぐん八たんき
 のものゆへ たちまち助太夫をきりころし しんめうけんの一チくわんを
 うばひとり そのよちくてんして ゑどへにげきたりしとちうにて ばん

ずいてうべゑといふ男だてにあひだん／＼身のうへをたのみしにてうべゑ心よくたのまれともなひてゑどはな川戸のてうべゑがうちにかくまはれみたりしがもとよりうつくしきびせうねんのわかしゆにていろにふけり身もちあしくいろぐるひなしつぢぎりごうどうせしゆへついにめしとられ身のきうあくろけんにおよびけれバ大江けへひきわたされんとあみのりものへうちこみゑどよりしな川へおくりしによふけてすがもりへかゝりにんそくども大ぜいうちよりあみのりものをおろしおきたてばへゆきさけをのまんとはせゆきしあとにてごん八かねてかくしもつたるこづかにてうちよりあみのりものをきりやぶり／＼てうかゞひいでゝにげゆかんとせしに人／＼そくどもたちかへりこれを見つけそれにがすなととりまくをごん八八ことゝもせずのりものにつけたるぞうもつのわきざしとつてぬきはなしあたるをさいはひきりたふし／＼てなんなくのこらずきりころしはだにつけたるしんめうけんの一チくわんとりだしこれさへあれバ身のしゆつせふたゝびよりともちかよるてづるとうちゑみてゆきかゝるうしろよりゑいとこゑかけうつつぶてごん八びつくりふりかへればめさきへさしだすてうちんのほかげに見あはすかほどかほてうべゑどのかごん八といふ八よをしのぶかりの名まことハしみづのくわんじや▲よしたかさまはやくこのばをたちのかれよといふまにおちたるいぜんにつぶてごん八手にとりこりや一トつゝみのおほくのかねハ「ろようにさつしやい」かたじけないれいハかさねておわかれ申すと一ツさんによはにまぎれてごん八あしにまかせてはしりゆ

きはや川さきのぼうばな六がうのわたしばにさしかゝるふねをたのむといひければこやのうちよりやぐちのどんべゑかほさしだしおれハせんどうじやがこゝのものハないさつきからだれぞわたしをこすものがあらバいつしよにわたらうとこのこやでねてゐたがさて／＼よるハどうちうぶつそうゆへ人がとふらぬいつまでゐてもはてしがないいそぎならこゝにあるふねをかりてわしがこしてやらうがそれもふなちんしだいじやとあしもとつけこむごうよくおやぢきつもつあしのごん八が心もせけれバわたしてさへくだされバいくらでもやりませう「そんならまづ六ごうといふ名で六くわんくだされといふにこいつしれものと思へどごん八ふところよりこぼん一チまいなげいだしはやくしやれといふにとんべゑかねとつてヨツトがてんとつなぎしふねへとびのれバつゞいてごん八のりけれバとんべゑさほさしこぎいだすあとよりおつてのこゑ／＼そのふねかへせとよばはれバわれハなむさんぼうとこれ／＼せんどうのぞみしだいかねハやるはやくふねをはしれ／＼といらだてバ心えましたととんべゑがるをおしたてゝゆくほどにふねハひがしのおきのかたへこぎいだしてよあけころかな川のおきにつきけれバよくにふけりしとんべゑがふねをとゞめて見れバこなたハゆへあるおさむらいそうながあとからおつてのくるやうすハごなんぎと見たゆへこゝまでこいではしりましたがさだめししつかりごほうびがござりませうな「いかにもなんぎをすくふてくれたほうびハそれと小ぼん十まいさしだせバとんべゑうちゑみまだこのうへどのやうなこゝでもたのまれませうといひける

にぞごん八ハ多つぽに入りそんなら身のうへおたのみ申さんそのもと
のゆかりによきやしきもあるならばしくわんののぞみといひければ
「それハさいはひわしがでいりやしきたけざはけんもつままハこの
かなざはにしろを

つぎへ

(四丁裏・五丁表)

つゞき かまへいまよきけらいをさがすさいちうそのやしきへごすい
きよいたしませうとのみこめバごん八よろこびまた十兩とりいだし
すこしなれどもとうざのほねをりまだこのうへにもおれいハいくら
もいたさんといふにとんべゑそんならすぐにかなざはのやしきへと
ろをおしきつてごぐ **▲** **ほどがや** のうらてをこへはやたけざはのし
ろやかたへつきしかバごん八ハ名をかくしはやのかん平みつおきと
なりとんべゑにもなはれてけんもつにめみへせしよりとんべゑに
おんあるぶしゆへさつそくにかん平をかへしにはつめいさいちの
わかものゆへきんじゆとなりてつとめとんべゑにハまた／＼かねを
やりしゆゑけんもつにすいきよなしほうこうせしにうつくしきわか
しゆなればおくづとめのこしもとおかるになれそめてかいろうどう
けつのちぎりをなしむたりしがいつしかこのことあらはれてたけざは
けんもつがきこへあればふたりともひとつとらへて手うちにせんといふ
をかんへゑほのかにきゝ大もうある身のうへをいのちがだいじ女
もふびんとよにまぎれこのやしきをぬけいで **とつか** にはしりお
かるのおやざとハこのしゆくのさいしよときゝそれよりどう／＼し

てともなひゆきしばらく身をかくしおかるのおやのうちにかくまは
れてゐたりしがくわんじやよしたかつら／＼思ふにわれかくすがた
をかへて身をしのぶもちよしなかのむねんをはらさんと思ふゆゑな
りしかるにかゝるさいしよにひそみあてハ大もうむなしくならんも
さんねんとかきおきをしたゝめてひそかにこのところをたちのきける
ゆへおかるおやこハかきおきを見て大きに **▲** なげきかきくどくこそ
どうり也されバよしたかハ **ふじさは** のしゆくへゆぎやうせう人ハ
ちよしなかのゆかり **■** あればこのてらへたづねゆきせうにんにあ
ひ身のうへをたのみけるゆへよしなかのちやくしゆへせけんをは
かり **▲** かまくらちかきことなればもれきこへんことを **◀** おそれて
らこせうとなしをぐりはんぐわんのちすじのものといつはりをぐりの
助と名をかへこせうすがたとなりこのてらにしのびるたるにもとよ
りびせうねんのよしたかことによしなかのちすじなればいやしから
ずひとがらよきわかしゆぶりにきんへんのむすめみるたび心をうご
かさぬハなかりけるこゝよりほどちかき **平つか** のあたりによろづや
といふ大しんだいのせうやありこのうちにむすめみゆきといふ女
つしかをぐりをふじさはでらのはなみるとき **つぎへ**

(五丁裏・六丁表)

つゞき 見そめてこひわづらひとなりければふたおやなげきかなし
みてむすめにことのやうすをきかせけるにふぢさはでらのこせうを
ぐりにしうしんのよしはなしければふたおやむすめのあいにおぼれ

ひそかに人をたのみをぐりをまねきければをぐりふしんながらもよろづやへきたるにてうゑもんといふあるじいでゝむすめのこひやみをはなしむことなつてくれとたのむにぞをぐり大もうある身なればよきたよりもとわざといつはりせういんせしかバふたおや▲はじめむすめのよろこび大かたならずびやうきもほんぶくしてをぐりとふふとなりむつましくくらしけるうちあるじあるときをぐりにいふやうわれもとハへいけのぶし也かくよをのがれてこのところにすいま御身とおやことなればつゝんでせんなしわが▲しよぢのたからを見せ申さんとをぐりをつれてくらのうちへともなひしなぐのたからを見せけるなかにへいけるいたいのたからこがらす丸のつるぎあるゆへをぐりハなにかにしあんしそのばハそのまゝけんぶつしてよろこびしていゆへてうゑもんもゆく／＼ハこのしなぐゆづり申さんといふをぐりその▲よのうちにくらへしのびいりこがらす丸をぬすみそのばをちくてんして大いそのかたほとりへ身をしのび今

■にぎはしきくるはのはんぜうなればこのさとにいりこみやうすをうかゞはゞよりともをうたんよきたよりもがなとすがたをバかへて

小田はらういらうりと身をやつしくるはのうちをはいかいしてよのありさまをきくにそがきやうだいハおやのかたきをうたんとあさひながてびぎにてこのくるはへいりこみとらせう／＼といふけいせいになれそめしときゝよしたか思ふにあさひなハわれとハはらがはりのきやう❖だいなれどわだへやうしとなりしゆへもしわが身のうへをさとりしられてハ大もうのさまたげなりとしあんをなしまた／＼平つ

かへかへりまんでうの つぎへ

(六丁裏・七丁表)

つゞき むすめにひそかにあひしに 大きによるこびこのうへハいづくへたちのき給ふとも一ツしよにともなひ給へやととりつきすかりなげくにぞをぐりいまさらふびんに思ひふたおやにあふてハわが身のうへあしからんこれよりすくにともなひてたちのかんといふにむすめもいそ／＼とおやにもいはすこひゆへにをぐりにいさなはれてすみなれしふるさとのわがやをはなれて ほどちかきさかみ▲のくににぞたどりゆくさてもよしたかハまんでうのむすめをつれてあしがらの里にかくれすまぬせしが▲せうばいハしらぬやせらうにんいつしかふうしつをやまひにとしられなか／＼のひやうきにたくはひもつきしかど大もうあるよしたかなれハみゆきにハおやのかたきを▲ねらふものにて山しろのらうにんほんみやうはいゝぬまかつ五良といつはり はこね こんけんにきせいかけほんぶくを❖いのらんとくるまをしつらいてこれにのりてつまにひかせてひごと／＼にこんげんへまいりけれバ つまのみゆきもをつとのびやうきをへいゆ▲させてたづぬるかたきをうたせたく思ひかつ五良にかくしてごんげんにその身をいけにへとなし三七日たきにうたれてあいはてるかつ五良ハこれをしらずこのほどよりまい日／＼さとへいゝようありとゆくゆへけふもまた里へゆきしと 次へ

(七丁裏・八丁表)

つゞき 思ひしに よにいつてもかへらねバ 大きにあんじ みちまでむかひにゆかんにハあしたゝず そのまゝあんじ ねいりしゆめにはこねごんげんあらはれてなんじがつまわれにいのりて身をへとしてあいはてたりふびんのあまりなんじがなんびやうハへいゆさせしそはやくこゝをたちのきてするかのくにへおもむくべしといふかと思へバゆめさめたりかつごらう おどろきながら 思はずもたちあかりわが身ながらもびつくりしてハつまハごんげんへ身をへとし あいはてしとハふびんのことなり ありがたきハごんげんのごりせうあらはれしやこれよりゆめのつげにもとづきするがへおもむかんと ▲ よういなしてそのあげがたに さがみをたち いづの **三しま** に さしかゝれバこゝに名うての女のとうぞく おせんといふものにてあひしにおせんもくせもの よしたかのひとがらに これまさしくこのごろ うはさのあるきそのおちうど しみづのくわんじやよしたか ▲ ならんときつせしゆへ わさとわうらいのしつとやつして よしたかのみちづれとなり 人なきところにて いろじかけにして さぐりよるをよしたかもそれとさとり とうかいとうに名のたかき 三しまのおせんとやらこのほうにこゝろあらバ みやこへのぼり 大もう ▲ せうじゆのそれまで しろようのかねがかりたいといふに おせんが さこそとさとり 大もうある身と見てとつた みしまおせんと **■** 見られしうへハなるにおよばず おのぞみのろよう おかし申すと ふところよりなげだすかね 八百両あまり よしたか手にとり **つぎへ**

(八丁裏・九丁表)

つゞき かたじけない とうぎのしちもつあづけんと しこみのつるぎさしいだせバ おせんハとつてうちまもり こりやこれ たしかにへいけのてうほう こがらす丸「これめつたにぬくまい あづけたしろもの」たしかにしちもつうけとつた まづそれまでハさらバ／＼とたちわかれ おせんハわがやへ よしたかハまづこのありさまにてハ **ぬまづ** でありたるかねにて その身をこふくやのあきんどにこしらへて 人しれずするがぢさして ゆきかゝりしに このしゆくに七十あまりのおやぢのくも助へい作といふものもと かまぐらのうまれにて よしたかを見しりそ ばへたちよりもしやあなたハよりもさまのひめぎみといひなづけ あつて一ツたんかまぐらへおいでありし よしなかのきんだちにてハなかりしかといふにびつくり よしたかハわざとかくして いや／＼わしハそのやうなものでハなし ぐふくやの十べゑといふ ▲ あきんどじやといつはれば「なるほど おかくしなざるのももつともながらわたくしことハ かまぐら八まんのしやけにて 大ひめのおそばへたび／＼ま どりあなたのかほハよくぞんじてをります いまかくおちぶれてくも 助となりさがりしも おほひめにたのまれまして よりともさまへあな たのいのちごひをたび／＼いたしたゆへきそのよるとげんじのうた がひそれゆへ かまぐらをついはうされて せんかたなくも このするがへきて かゝるまづしくも助 あなたさまを見るにつけむかしが思ひ だされまずと 身をくやみて しほるれバ よしたかさてハとふびんにお

もひとしおいてさだめしなんぎにあらんなるほどわれハよしたかなれどもしつてのとふり世をしのぶ▲身のうへなればそれとハなのりがたしかならずくよしたかの事人にさたすべからずとうぎの▲なんぎ見かねてしんぜるさせうながらと小ばん十まいやりけるにぞへいさくとつておしいたゞき☒おしいたゞきかたじけなみだ見おくれバ十べゑわかれていそぐまつなみき

つぎへ

(九丁裏・十丁表)

つゞき こなたハふじがね

はら よしはら

とたどりゆくこなたのかたよりおゝいゝとこゑをかけはしりきたるものありよしたかふりかへり見れば身ハすみぞめのやさほふしふるしきづゝみをせおひあじろがさにておもてをかくしゆゑありげにあゆみよりいかによしたかぎみちゝのとむらひいくせんとてさまゞにすがたをやつしかなんくらうなし給へどもいまよりとも四かいをにぎりにつほんそうついほしせいあたいしやうぐんとあふがれ給ふハまつたくじんりきのおよぶところにあらずこれてんよりさづけしてんがのたいしやうなか〱御身いかほどにねらふともたまごをもつてばんじやくをうつにひとしおもひとゞまり給へわれこそハきんていほくめんのおしさとうのりきよいましゆつけしてさいぎやうほふしと申スなりちゝよしなかとハちかしきとも也はからずぬまづのまつばらにてへい作とやらがことばにてよしたかこうときゝしつたりそれゆへおんあとをしただひかくハ申シあげたりはつたいめんひきでにこれをしんじ申さ

るところもそでよりこがねのねをとりにだしこれこそわれかまくらどのへけんぎんのひきでに給はりしがしゆつけの身にてたからハむえきよしたかこうへまいらせんとさしだせばよしたかとしてだいぢへなげすていかにのりきよわれいやくもあさひせうぐんよしなかのちやくしとうまれ一ツたん思ひたちしちゝのあだこのまゝむなしくとゞまらんやいけんかんげんきくもうるさしけがらはしやふたゝびものいふなさらバぞとよしたかハあとをも見ずにしのかたへといそぎゆくさいぎやうあとをうちながめ〱むえきのくちをひらいたりとすてたるねをとりあげてさてもよしなきよしなかの身のためならぬかたきうち世ハさまゞのひとごゝろトひとりごちしてすご〱と又もあづまへくだりゆくすがたハすゑのすゑまでものこりてふでにかきつたふさとうのりきよが身のなりゆきぞゆかしけりされバごふくやすがたのよしたかハのりきよにふだうに身のすでうを見すかされ大きに▲はらたてそのばをけたていそぎしにかんばらのほとりにちかづけバいちめんうみづらにていはほにこしかけしぼしやすらひたるをりからのばかまはおり大小にてりつばなさむらひよしたかのそはへたちよりそつじながらそのもとにハてう人〱とさまをかへ給へどもこゝろに大もうあるにんさうなりつゝまざあかしなのられなバかたきのたすけともなるべしいかに〱といひけれバよしたかきつと見ておん身もいちもつあるこつがらわれこそハトいはんとせしがいつわつてとうじらうにんにてかないたに五良といふものしてそのもとのせいめいハとたづねにさむらひふと

ころより しらはたをとりいだしそれがしこそへいしんわうのこうい
 んにて たちばなのもろゑのちやくりう **ゆい**ひやうぶのすけじやうゑ
 つといふもの よりとも にうらみあつて かまくらをくつがへさんかね
 てのたいもう いまそのもとを見るに かまくらに うらみをふくみしに
 んさうあるゆゑ たいにちからをあはせんと おもふゆゑに たちよりて
 ことばをかけたなり しよぞんはいかにととひければ「いしくもさとりし
 じやうゑつどの われかねぐ」よりともをうたんと つけねらへども
 身がらいつしんにて くはだてかたるひともし いまそのもとをきし
 にかまくらにうらみありとハよきかたうど これより たいにいこゝろ
 あはせて 大もうのくはだてなさん それにつけても ひとつの手だてハ
 このかいだうにかくれなき とうぞくのてうぼん しらいやといふもの
 いまこのほとりのゑき ありときく われ しらいやに たつねあは(と)
 きやうちうさぐりて かたうとになさんと おもへども うかつにだいじ
 をうちあげがたし このぎはいかにと いひければ じやうゑつ につこと
 うちわらひ これもかねぐじらいやにめぐりあひ このことなさんと
 おもふゆゑ これより おきつへ たづねゆき ことのやうすをさぐりみん
 おん身ハみやこへおもむきて おほうちやうす見とゞけて つげしらす
 れよわれかまらのやうすを うかゞひきでんへしらせん いかにか
 ととひければ ▲たに五良いさみたち しからバ このまゝみやこへ
 たゞれよさりながら わかしゆにて ひとめだつ 六十六ぶとすがたをか
 へくわんとうぶしに いでたゞんと たいにみつじをかたりあひま
 だのさいくわい そのときと ひきわかれゆく ゆうしとゆみとり 四かい

をのぞむ だいたんふてき わかれてこそはいそぎゆく

○たに五良ハすぐに すがたを六ぶとかへ ひとにしらす だゞひとり
 かねうちならし ゆくそらのはやほどもなく **ゑじり**をこへて **ふちう**
 のしろを見かへりて ゆくともなしに **まりこ**にゆき よしたか これよ
 り おもふより ^(う)せんたつて のりきよが われにあたへし こがねのねこ
 と おもひあはせし このつたのほそみちに ねこいしといふきいのいし
 あつてをりごとにくわい(ゑ)をなすとき、およぶ これより山中へわ
 けいりてそのねこいしを見とめんと しゆぜうをついてしとぐとつ
 たのほそみち わけゆけバ くさおひしげりし そのうちにねこのかたち
 の大せきあり よしたかきつとながめてきてハこのいし せきこんの
 こりしか たゞしハくわい(ゑ)のわざなるか ためしみるにハ われるい
 だい つたはるあさひのみだのそんぞうこそれいけんあらたなり ふし
 ぎにみんと そんぞうとりだし せきめん にさしつければ **つぎへ**

(十丁裏)

つゞき ふしぎや あたりめいどうし ねこいし たちまちさんらんして
 とちうよりあらはれいでしハとしふりたる大ねこの ばつくん すぐれし
 かたち にちくちより くわゑんをふきいだし ひとのものいふこゑをは
 つしわれとしひさしくこの山にすむといへども こぎのりけん にこの
 ちをさり さよの中山へ すみかをかへて ふたゞびくわいぬをなすべし
 わがつうりきを(これ見よ)としんどうらいでん ▲はたゞがみつちす
 などばし かの大ねこのすがたも たちまちくものり まふうととも

とんでゆく **おかべ** もいつか **ふちゑだ** こへゆくへもしらずとびさりしハあやしおそろししい也 よしたかきいの思ひをなしみだのそんぞうふところへをさめたかほのふてきのわかもの 又もすがたをやつさんとゆうくとしてたどりゆく

五瓶作
國貞画

(十一丁表)

されハよしたかハみやこのかたへこゝろさしてたどりしが六十六ぶのすがたにてハよろづにたよりもあしけれバもとよりよいのかねもたくはへあれハ **▲**くわんとうよりみやこへじゆんけんのぶしとなりこまさは次良ぎ多もんとなりわうらいなして **しまだ**のしゆくへきたるをりしもこのしゆくにあさがほといふもうもくの女さみせんをひきうたうたふにおもしろくしゆせうなりとてみなこのあさがほのうはさなしけれバ次良ぎへもんもそのうはさをきゝなぐさみにきかんとてやとのものに申すゆへはたごやのかないのものハつねくひあきのあさがほなればさつそくによびにやりけれハ次良ぎへもんハさしきへさけさかなとりよせじゆんけんのやくにんときゝしゆへきんごうのやくにんきたりてもてなしゑるところへあさがほハやどのもの **▲**いざなはれざしきへきたる次良ぎへもんハなにこゝろなくあさかほのかほをよくく見ればとつかのざいにておきざりしてわかれたるおかるゆへ大きに **次へ**

(十二丁裏・十二丁表)

つゞき おどろきいかにしてもうもくとなりこのあたりにさまよひしと **▲**ものいはんにも人のあり大もうある身のうへそれとハいはれずむねをくるしめゑたりしにあさがほハさみせんとしてひきならしうたふ **▲**こゑさへしゆせうなるおんせいうれひをもよふせば次良ぎへもんふびんさにそれとハなしに小ばん十両とりいだしだめし二ッおやもあるべしもうもくの身にてふびんのいたりこれハこよひのはなだいとわたせばとつてありがたなみだふしをがみくわかれしをつとつゆしらず一ッれいのべてたちかへるざしきもかたづけ次良ぎへもんそのよハふしてあくる日ハそうくになちいて、大井川をなんなくわたり **かなや**のしゆくへさしかりしにかまくらのはやひきやくみやこへのはやつかひゆく七ツまでにつさかのしゆくへまちはあはせのことありとのよしこれをきくよりよしたかハたしかによりともきんくみやこへ上らくのしらせなるべしいざやおつかひきやくを手にかけて一ツつう **☒**うばひとりようすを見んとゆきかけしがときうつればおツつきがたししかし七ツをうたバそのところへとゞまりをるべしさいはいこゝより三四丁さよのなかやまへはせゆきむけんさすのかねを七ツについてひきやくをとめんと身がるにこしらへよしたかハ **につさか**よりきたみちづたひな山へはせゆきてかのむけんさんのしゆるうへあがり人なきをさいはひにつきがねごとうつおとにてらのものどもびつくりしこれハいかにといふうちにまたもつゞけてごんくとひゞけハみなくさはぎたてそれ

つかすなといふうちに三ツ四ツとつきたつるどつこいならぬと男どもさゝへるものをつきのけなげのけなんなく七ツうちきつてあとをも見ずしてよしたかハひきやくのとどまるところをバいづくとしらねど心のふてき◀すがたやつしてはしりゆくかまぐらのひきやくといふハこのたびよりとも大ぶつくやうといひたてみやこへ

つぎへ

(十二丁裏・十三丁表)

つゞき 上らくしてきんていしゆごのものをさだめてきそへいけのざんとうせんぎさせんとのためにしてかまぐらさんろうよりくわんぼくへのつかひなりしがよりとも上らくゑんいんとなりしをない／＼のしらせなればあとへひつかへさせんようすゆへおひ／＼つかひきたるゆへひきやくのやくにん▲七ツのかねをき／＼かけ川のほんぢんへとどまりければよしたかはせきたりこのようすをきくよりすぐさまかけ川のほんぢんへきたりかまぐらさんろうよりのはやおひの▲ししやといつはりたいめんして申けるハさんろうのかたゞきふにひやうきの事あるにつきいつたんつかはせしみやこへのしよかんこのほうへとりもどきたれとのししや也いそぎわたさるべしといひけるにぞひきやくのやくにんさきぶれありし事なればなんのきもつかずさんろうよりのしよめんをわたしければ▲よしたかとなるよりはやくあいさつのべていそぎいでしそのあとへまた／＼かまぐらのししや▲きたりあとへひつかへすべきつかいゆへいまししやきたりてしよめんをわたせしといふにあとよりのししや大き

におどろきそれぞくせものおつかけいとげちしておつてをつかはしけるよしたかハさんろうの一ツしよをばひとりいざやみやこにおもむきはかりごとを(脱文ある)がんどてうちにみちをてらしのばかまはおり大小にてしび／＼にゆくうちにかまぐらのさんろうの一ツしよをうばゝれしゆへあまたのとりてをいだしおつかけさせきびしくせんぎなしければよしたかのがれんかたなくみちにて女をきりころしその☒きるいはぎとり女のすがたとなりてゆきかゝりにおひ

つぎへ

(十三丁裏・十四丁表)

つゞき おつてのやくにんきたるゆへまづ身をかくしてしのびいでしづまりしあとにてしづかにことをはからはんとうらみちへゆくにふくろ井のざいにじけんじといふわうばくしうのてらありけれハこのてらへゆきてぢないのやうすをみるにくつきやうなるしゆるうだうありいしがきたかくそのうへにからはふづくりにりつばのらうがくしゆぬりのかうらんけつこうなるしゆるうなればこれさいはいとよにまぎれてこのうへにাগりしひてしほし身をのがれおつてのやくにんこゝかしことたづねよしたかのゆくゑしれねバしゆくぐへゑすがたをもつてはいふをまはしてさがしけるこのころ見つけになだかきしらつか十ゑんといふ男だてありけるゆへやくにんこの十右工門をたのみよしたかのにんさうがきをわたしおけバ十右工門いさいころえそのきんへんをたづねさがせしにころハやよひのはな

ざかりゆへかのじけんじへはな見がてらにゆきしところ ▲十右工門が子ぶんのものくろつかさんへいといふものこのしゆるうのけつかうなるを見てこのうちをけんぶつせんとなにこゝろなくしゆるうへあがるをよしたかおどろきとりてのやくにんと思ひかくせしかたなひきぬきてきりたをしまたもきたらバきりたをさんとかたなひつきげかうらんへかけいで四ほうに目をくばりゐたるに十右工門ハさてハくせものこのところにしのびをるかと身をかためきつとしゆるうを見あぐれバうつくしきかほを女とハみゆれどまさしくひとくせあるやつもしやはいふのよしたかならんとすがた多いだしてよくみればまがふかたなきよしたかゆへうちとらんと思ひしがかれもげんじのちやくりうにてきそのちやく子なれば心のうちにゆだんのでいをなしわざとぢないをいでければよしたかもしやきんへんをとりかこまんととほざかりしものならんこゝにあつてハふくろのねづみはや／＼ほかへのがれんとしゆるうよりとびおりておつてきたらバ▲きりぬげんとまなこをくばりあたりを見るにさへぎるものもあらざれハ心しづかにおちてゆくだいたんふてきの

つぎへ

(十四丁裏・十五丁表)

つゞき くせものと十右工門ハおつかけもせずなにか心にしあんしてわがやへこそハたちかへるよしたかハ身をしのばんにせんぎきびしければとう／＼みなだへふねにてこぎよせしにこのせつきうしうよりげんかいのなだゑもんもとけそりの九右工門といふかいぞくこゝへ

こぎよせいたるをさいはひこのふねへ ▲ゆきてなだゑもんをたのみわれこそしみづのくわんじやよしたかなりこんどみやこへはせのぼりちよしなかとむらひいくさもよふさんためおもむくなりさりながらゑんしうのみち／＼せんぎきびしければしばらくかくまひくれよとたのむゆへなだゑもんもよしなかのちやくしなればのち／＼よしたかもし世にいでなバよきかねもふけのつるなりとこゝろよくかくまひおけバよしたかあんとしてまづこのふねのうちにかくまはれせけんのありさまをきゝしに

はままつ

まひさか

つきのことゆへかまくらよりせんきまち／＼にてこのころよりともよしつねのなかふわとなりかちはらのぎんげんにてよしつねかまくらのうたがひうけてみやこをひらきみちのくへくだるときたあるによつてかまくらのいかりつよくしよこくへしんせきをかまへよしつね身よりのものをめしとらんとのさたなればなか／＼よしたかうかつにわうらいなりがたきようすなればいかゞしてみやこへゆかんとさま／＼にくろうしていたるにまたもかいだうきびしくなり

あらぬ

にせきしよをすえわうらいの人ぐ／＼いふにおよばずにもつまでもあらためるとのよしきゝければしよせんとうかいだうハわうらいなりがたしさんしうより山ごへにしなのぢへぬけてほつくくかいどうをゆかバこゝろやすかるべきやとなど右工門にさうだんなしければハなた右工門いひけるハまづてしたのものをきんこくへつかはしようにすをきいたるうへにてゆき給ふがよしうかつにゆかバ身のだいいじならんといひければげにもつともとまた／＼こゝに身をひそみい

たりしになた右エ門 ほとこくちへ手下をいだし

つぎへ

(十五丁裏・十六丁表)

つゞき

いだし(マ) ようすをきかんとつかはしけるにほどなく 手下のもの

の たちかへり ほとこくのようすきゝいたせしとうかいだうよりハ
なほきびしくしかもこのごろ よしつねげんべい四天王のめん／＼
あたかのせきへさしかりしにせきのやくにんとがしのさゑもんみ
な／＼をさへぎりこのほどより つくり山ぶしとふりしゆへめしとつ
てけうぼくにかけてり 山ぶしとあれバなほ／＼ ▲とふさじといひ
しをべんけいいつはりてとうだいじこんりうのくわんじんなりと
ておひのうちよりゑてもしれぬまきものをいだしくわんじんてうな
りとしてそらことをよみあげしにとがしの▲さへもんべんけいとさ
まぐにもんだうせしがべんけいが▲べんぜつにいひふせられそ
のうへよしつねを▲こりきにしたてすこしのそさうにうちたゝき
なぞしたるゆへせきしよのやくにんうまくとたばかられふせもつ
などをつかはしこゝろゆるしやす／＼とあたかのせきをこへたるよ
しあとにてこのことあらはれたるゆへとがしのさゑもんかまくらへ
あいたゝすへいもんときくせきしよ／＼ハます／＼きびしきゆへす
こしのももあらためあやしむじせつ也ことにハみやこより☒かま
くらへなにやら／＼日ごと／＼にひきやくとふるときけバよした
かこうなか／＼うかつにハとふりがたしとものがたれバよしたかき
いて大きにおどろきかくてハきうにみやこへハのぼりがたししかし

みやこよりかまくらへまいにちのひきやくとハがてんのゆかぬことな
りこのつおはづ(を)まず大もうのくはだてなさんとおもふにかひなき
わうらいのせきしよ／＼ハまたげなりいかゞしてとふらんと心を
いためしあんのていなど右エ門ハよしたかのこゝろ(を)さつしいか
によしたかこう御身さほどにみやこへのぼらんとこゝろをいらち給
はゞかほよき御身のしやくねんなれバいせさんぐうのこせがれとす
がたをかへてとふるならかいどうにていせまいりのものハむかしよ
りせきしよ／＼のてがたなしわたしにてもむせんにてとふすものな
れハいせまいりのでつちこものゝすかたにやつしてのぼり給へとい
へバよしたかうなづきげに／＼そのすがたにてのぼらんといそぎ
よいしていせまいりのでつちとやつしてふね(を)おたちのきまづ
しらすかのしゆくへいでてようす(を)おきくに☒手下のものゝいひしと
ふりわうらいきびしけれバしゆくのうらてより山みちへかゝりしに
さむらいひとりかたなばこおせおひてあとになりさきになりあゆみ
ゆくよしたかわざとこゑかけておさむらいさまにハいづかたへおい
でにやわれらハあきはさんよりほうらいじへさんけいいたしたいが
このみちへゆけバとふられるやとたづぬれバかのさむらいハ申スやう
われらもしらずこのほうハこのさんちうにさいががけのらいさくとい
ふらうにんあるとのうはさにてそのらいさくあらゆるめいけんをも
とむるよしわれらちうだいもちつたへしめいけんあれバめきゝして
もらはんとゆくものなりといふよしたかいつはつていふやうわたく
しハくわんとうにてめいけんめいさくのめきゝのいへにつかはれし

こものにて一トとふりのつるぎなら見わけのなりこしよちのつるぎハ
 いかやうのめいさくとさくかのさむらい申スハ「わがもちしつるぎハ
 あまくにのほうけんなりこのつるぎハなか／＼ほかにもちてなくな
 はのてうにんふじやといふ大じんだいのぶげんのしよちなりしがふ
 じやのむすこに×いざゑもんといふものしんまちのけいせいあふぎ
 やのゆふぎりにしんだいいれあけとゞのしまいかみこのすがたとお
 ちぶれたときいへのたからあまくにもうりはらふたゆへわれらがし
 ゆじんこんどおもとめなされたれどあまりこぶつゆへめきゝのひ
 となしとうごくさいががけのらいさくならでハしるものなしときゝ
 たゞいまもちゆくなれどそのほうめきゝのおぼへあらバはいけんし
 てめきゝして見やれとはなしながらゆくほどに〔ふた川〕の山つゞき
〔よし田〕よりにしのおさんちうきたにあたつてさいががけのたにあい
 へきたりよしたかこゝろに一チもつあれバしからバそのつるぎ
 はいけんいたすべしすべてつるぎハやきばかないるにてうちてのじ
 だいしれるものゆゑめきゝといふハたゞやきばかないるにてそのじだ
 いをしりしんきを〔つきへ〕

(十六丁裏・十七丁表)

〔つゞき〕 わけるものなればわれらもそのくらゐの事ハこゝろおぼへあ
 りといふゆゑかのさむらいせおいしはこをおろしてなかよりふく
 ろにいれたるつるぎをいだしていざといひツゝさしたせバよしたかハ
 あたりのいわへこしうちかけちりてうづして身をきよめつるぎをとつ

てぬきかくればふしぎやつるぎのきどくにやそらかきくもりなりだ
 すかみなりよしたか見るよりさてハうたがひもなきあまくにのほう
 けんなる〔り〕見るうちにかのさむらいがいるあをぎめこれ／＼わしハか
 みなりがだいきらひこゝにハゐられぬてんでうのあるうちへゆかねバ
 ならぬそのかたなこつちへかへせととらんとすればよしたかゞはて
 見わけねバわからぬといひさまつるぎをぬきはなせバます／＼はげし
 きかみなりにさむらひわな／＼ふるふを見てよしたかそばへにじり
 よりかいほうするていに見せおびぎはとつてひきよせてたにまへは
 たとつきおとしきつとそらをうちながめときならぬいかつちもとき
〔こ〕とつてハよきせんびやう四かいへとゞろくきそのはたあげてん
 へひゞくハみやこへやす／＼のぼるのきちずいふしぎに手にいるこの
 あまくにかたじけないとうちゑみてほんかいだうへとあゆみける
 むほんのねぎしぞふてきなりよしたかハやまみちをいそいでゆく事三
 四りもはしりしにみちせまきがけつゞきばくたいなるゐのしゝ▲
 いつさんにとびきたるゆへよけんにもみちなくいかゞせんとおもふ
 うちあとよりかけきたるをのこありこれ／＼またれよそのておひじ
〔ゝ〕とめてやらんといひざまきたりゐのしゝをかたてうちにうち
 けれバしゝハたゝかれよな／＼とあとじさりかのあらをのこ
 あたりのまつのきひつこぬきまたとびかゝるゐのしゝをまつのきに
 てりう／＼とうちけれバしゝハめくるめきしと見へ二三べん
 くる／＼とまはりしがはななくちよりちをはきてそのまゝにたを
 れしをよしたか見て大きにおどろきいかなるひにてかくすさまじ

きゆうりきなるやといふかれバかのをのこうちわらひわれハこの
 さんちうにすまぬなしてきこりやまがつをとせいとして世をわたる
 やまもとかん助といふものなりうまれついでちからづよたちうちも
 すこしハころがけあれどもよきし(し)やうなけれバむなくころに
 日をおくるなりとはなしけれバよしたかもやがてはたあげせバみ
 かたへつけん▲ものところにうなづき一チれいのべてわかれけ
 るこのとききんへんむら／＼と／＼にへておひじいであれ
 るゆへし／＼がりありしがこゆじゆくよりはるかにかんすけが手お
 ひじをうちころせしを見ておどろきてさて／＼だいきのすさまじ
 きものもあるものかなとてんでにとをめぐねをいだしはるかの山を
 見てめをおどろかしるたりけるこの日よしたかハあかさかのうらて
 よりほんかいだうへいでゆかんとて山みちをにしみなみへとゆくとこ
 ろにこのきんへんいぜんのゐのあれいでしゆへむら／＼にてし／
 がりとてかねたいこほらがいにてありや／＼のこゑすさまじくきこ
 へしゆゑよしたかハきずもつあしゆへもしやわれをとりまくおつて
 ▲かとみ／＼をおどろかしきみわるくたどりしにむかふよりひやく
 しやうらしきもの とふりか／＼りしゆゑよしたかよびとゞめあのやう
 にかねたいこのおとハなに事とたづぬれハされバあのかねたいこハ
 し／＼がりといひたててまことハさ／＼きの四良をとりまいてうちとるた
 めのかねたいこなりといひ(ふ)よしたかおどろきそのさ／＼きたかつなハか
 まくらのゆうしなるになにゆゑとりまいてとらへんとハするぞとき
 けバかのひやくしやうがしつたかしらぬかあたりのいしへこしう

ちかけこれにハだん／＼わけのあることマア一ツぶくしてきかつしや
 れこのせつ❖かまくらのたいしやうよりもさまハきやうだいのな
 かわるくなりかぢはらのさんげんをまこと／＼き／＼だいまやうハこ
 ろ／＼になりみな×くに／＼へひきこもりしなかにさ／＼きたかつな
 ハとういふしよぞんやらふじ川のさいにかくれしのでとうざふら
 うと❖いふひやくしやうのすかたとなりみうらのすけよしむらと
 がつたいしてかまくらをうたんとつけねらうたかあらはれてもし
 にげかくれぬやうにとてし(し)がりといひたて／＼おつてのものがひ
 やくしやうのすがたになりかねたいこでせめよせるといふ▲こと
 したがなにしおふさ／＼きつぎへ

(十七丁裏・十八丁表)

つゞき たかつなゆゑ／＼(ママ)いくらおほせいでもとる事かならぬとこ
 ろをおかざきのしゆくにけんじゆつのみいしんあらしのこてんぐと
 いふひとかたはこきりになつてみたけながこのことをきいてその
 さ／＼きたかつなをめしとつてき(し)あけませうとうけやつてけふのひ
 らからそのあらしといふけんじゆつつかひがうつてのやくをこひうけ
 てさ／＼きたかつなをとりにてたといふことじやがなか／＼さう／＼し
 いさはきでこさる(ト)しどうをはなしてわかれゆくよしたかハきくに
 つけさてハかまくらにてハきやうたいのふわゆへたいみやうのこ／＼ろ
 もさま／＼のやうすこれそさいはひそのきよにのつてみかたをあつ
 めてきそのはたあけとむらひかつせんさりなから▲このさんしう

ハちよしなかくゆかりのものおほからんみかたへまねくにハまた
 くかたちをやつさんとうたまらのくきやうさいこちうせう▲な
 りひらのあとをたつねるものなりともひとまとふてゑほしかりきぬ
 のすかたとなりこゝにも▲なだかきみかはのくにやつはしむらへ
 あんないさせむりやうじといふ大でらへりよくわんをかまへきんご
 うきんざいのぶけをよひよせきんていのちよくしと☒いつはりめい
 しょこせきをたづねんといひふらしぶしを見たててそのきれうを☒
 ためしてためして^(ママ)みかたへつけていちみさせしにあさひけんじへ
 くはりし

つぎへ

(十八丁裏・十九丁表)

つゞき ものあまたありければさいくわいをけいやくしてあふみの
 くにあはづのよしなかのはかわらをくわいごふのちとさだめくわい
 ぶんじやうにてふれしらせんまたかさねてのたいめんハあさひのはた
 をなびかさんといさみ▲すゝめバみかたのしよぶしいさんでおの
 へよしたかを見おくりければよろこぶきそのわかだいしやうやが
 てぞひらくかきつばたにたりやにたるむらさきのくものうへひと
 りひらのすがたをにせてみかたをまねくよしたかハそのぼをたつて
 またこゝにちりうのゑきへとうりうしてよのふうせつをうかどふ
 にいまたへいけのざんたうこのきんこくにかくれしのぶのやうすな
 れバかまくらよりきびしいひわたしもしさやうのものはいくわい
 すればたちまちとらはれるよしきしゆへよしたかもゆだんをせず

こゝにしばらくしのびしにをはりのちへいけのさむらひ七びやうゑ
 かげきよゆかりありときよよりともにうらみあるかげきよなればた
 づねあふてこゝろをあはせかまくらをくつがへさんにたよりよしと
 よしたかひそかにむねのうちにしあんをきはめなにとぞかげきよに
 めぐりあひたきものとをりくかくれがはいづれとららどへどもた
 れあつてかげきよハかしこにをるとたしかに▲しつたるものもなく
 またしつたりとてあからさまにいはずかまららのせんぎもきびしくな
 れバくちへいだしいふものなればよしたかも◀いまハじしんに
 たつねんにしかずとみやこのさむらひとすがたをあらため日ごとに
 さまよひたづねけり

●されバよしたかハかげきよハこのきんへんをはいくはいして

なるみ

のゑきへさしかりしにふかあみがさのさむらいむかふよ
 りくるをみてこれこそハかげきよならんと思へ▲どもそれといはれ
 ねハわざとわざとゆきちがひさやあてながらこゑをかけわうくわ
 んとハ申ながらぶしのさやあてハきつくわいなりあいさつしてとふら
 れよといはれてかのさむらいたちどまりそつちからりよぐわいの
 ☒さやあてハこのほうハ世をしのぶらうにんゆへよけてとふせバド
 やかうとむづかしく申すならぜひにおよはずかたなのやくめとぬき
 かけれハよしたかハこれさいはひとおなしくかたな引ぬきてたかい
 にいさと立やいうちあふそのうちによしたかこゑかけかげきよどの
 あつはれしゆれんそのほうのしゆれんをまじへよりともをうたんだり
 やうけんいかにといひければかげきよきつと☒身をかまへて御身

げんじのせうとうなからなにゆへにそれがしをさぐり見らるゝやよ
 したかどのとほしをさしたる一チごんによしたかびつくりきてハ
 それかしを御そんじあつてか「いかにもさきたつてよりそれとしつた
 るゆへゴしよそんをきゝたゞしたがいに心をあはせんわがしよそん
 思はずあひしハさいはひ也今より心をあはさんとうちあかしたるしん
 ていにしマツよしたかも大ききによるこびきんクよりとも上らくのその
 ときにハおたがいマツに心をあはせてうちとらんまづそれまでハ身をまつ
 たふしてじせつをまたんさらばクとさうほうへわかれてたがい
 にかへりしかそれよりよしたかミヤのはまべにせんどすとすがた
 をかへよりとも上らくのにもつふねにつみゆくにハちがひなしそれ
 と見たらくつがへしのこらずばひとらんと手下をあつめてかいぞく
 をなしうかゞふところ思ひクによりともものにもつツギへ

(十九丁裏)

つゞき 大まはしにのぼせけるゆへ 手下をまはしてかい上ツにてうは
 ひとりぐんようのたよとなし かげきよのかたへもしらせけるある
 ときよしたか 大せんクにうちクのり **くはな**のはまより **四日市**のおきへ
 のりいだし かいせうをのぞみしにひがしにあたつてはなびをあげし
 ゆハ(ハ)よしたか いぶかしみ「ハテこゝろえぬいまはるのすゑにして
 いまだはなびをあげるじせつにあらず▲さりながらこのなゴのう
 らのかい上ツにハをりにふれてしんきらうあらはれはなびをあげは
 なクしき事たびク見ゆるといふそれハはまぐりきをふくてんきの

いきほひなり いまこのおきにあたり見ゆるハまさしくそれならずは
 うくわのじゆつかこハへきたるわがふねへしさいぞあるか心ならず
 と見ゆるそのうちらんでうにきこゆるかひがねたいこのおトどすさま
 しくきこへしかバよしたか心に思ふやうわれそもクせんどうとな
 りしゆへくはなやとくさうと **下の巻**へ

五瓶作 國貞画

(二十丁表)

つゞき なをかへしにきそのちやくしとしつたるものありしなるかと
 あたりをにらんでたつたるところへふねにありあふ手下ども一チど
 にどつとよしたかをおつとりかこみ手下となつていりこみしわれク
 ハかまくらのかくしめつけめしとるやくめといひければよしたか大
 きにいかりのハしりきてハうぬらハかまくらがたいいけてハおかぬこ
 の世のいとまどかくしもつたる一トこし引ぬききりまくれバ 手下の
 ものどもきりたてたらハみなハうみへとびこむありそくぎにきら
 るゝものもありふねによしたかたゞ一人かたなひつさげよらバき
 らんと目をくばるされどもよしたかのいきほひにおそれちかよるふ
 ねもあらざればかくさとられたるうへハこのはまのあたりにもすま
 るがたしとつけたるてんまのこふねにのりくがぢへはしらせ四日
 市のざいに身をしのびかげきよのかたへこのよししらせかくれみた
 るにたくはへしだいにともしくなりしかバよしたからうにんのす
 がたとなりわうくわんへいで思ふやうわれせんにげんじのちやくり

うにして よりともとハちかしき一ツけ也 なにもさまで かまくらを
おそるゝことなし かげきよらとハちがふ身ぶん也 ▲よきたよりもあ
らバ かまくらへ 申つかはし ぐんようきんといひふらし かねをかり
んと思ふゆへ あるとき いつものごとく らうにんのすがたとなりて
石やくし のしゆくを とふりかゝりしに かまくらより なんとどうだい
じへ 大ぶつくやうのきふのかね三千両 うまにつみて とふりしゆゑよ
したか これさいはひとつまを つぎへ

(二十丁裏・廿一丁表)

つゞき よこせと たづなをとれバ うまかたおどろき うまどうぞくめ
とつかみかゝれバ ぬきうちになまかたをきりたをし うまのくちなど
ひつたてゝゆかんとす これをきゝつけと ころのだいくわん さいれう
のさむらひ おひくにはせきたり ぬす人やらぬとおつとりまきしが
よしたかのこそでのものに さゝりんどうついたるゆへ もしや かま
らのごかもんかとうたがひて 手だしもせず あとずさりして いたるゆ
へ よしたか やくにんにむかひ われハ よりともものむことなつたるし
みづのくわんじやといふもの也 かまくらへ かへり このよし申とうぶ
んしやくようといひつたへよといひすてゝ うまをひつたてゝてた
ちかへる だいくわんやくにん かほ見あはせ よりともさまのむこなら
バてぎしもならず このうへハかまくらへたちかへり このよし 三らう
へ申あげんとすごゝとくわんとうすぢへ ひつかへす よしたかう
ちゑみ心に一チもつありければ せうの のかたへ かのうまをひいて

ゆきしがくたびれしゆへ かたへのどてに こしかけて ゐたるところへ
大にんぼうといふ このあたりにて なうてのあくそうとふりかゝつて
よしたかを見て ▲もしおさむらいさま げうさんなおかねを うまか
たもいぬにどこまで ひいてござりますと きくも いちもつある たら
つき 見るよしたかも うなづいて 「コリヤよりともハおれがしうとゆへ
大ぶつへ きふのかねを とちうでかりてきたが まごめハリよぐわいし
たゆへ きつてしまふた そのほう このうまを おれがうちまで ひいて
ゆけ ほうびハのぞみしだい くれうぞときいて よろこぶ大にんぼう
ついに うまハひいて見ぬがごほうびに ▲なることならどこへなり
と引ませうと うけやいけれバ そりやかたじけなく ひいていことくち
づなとつて ひいてゆく よしたか あとから ゆうく と つきせいゆき
わがくれがの四日市ぎいにきたり 大にんぼうにかね ▲ばこおるさ
せうちへ はこばせしが ひいて ☒きたるうまの じやまに思ふゆゑ
「コリヤくぼうず これまで ようこそきたたいぎく そのほうびに
ハひいてきた あのうまをほうびにやるぞ はやく ひいてかへれく と
いはれてびつくり もしくそりや なにおふせられる ほうびハのぞ
みしだいときいたゆへ ぼうずが うまかたをいたしましたに うまをも
らふてなにゝいたしませう ☒なんでも おかねをすつしりくださりま
せと ゆすりかゝれバ よしたかハ かねがほしくハかねやらうと さしぞ
へひらりとひきぬけバ びつくりとびにげ 大にんぼう あとをもみずに
にげかへる よしたかハあたりのものをよび うまをバ石やくしのしゆく
へかへさせ それよりをりくわんくわんへいよりとも上らくのや

うすを つきへ

(廿一丁裏・廿二丁表)

つゞき うかゞひしにはやおひくさきぶれきたるよし かめ山 のしろのきんへんをはいくわいするをりからかまくらのらうしんいそがいがしもべなかのとうべゑといふものしゆじんのかたきあかぼりみづゑもんをたづねこのぜうかへきかゝりしがよしたかとすれちがひたしかにしゆうのかたきと思ひあとよりおつかけゆきてよびとゞめそつじなからそのもとさまハかまくらにごほうこうなされしあかぼり氏とハ申さぬかとたづぬれバもしやかまくらのまはしものにやとよしたかわざとかほをそむけわれらさやうのものならずもつともかまくらにハゆかりありときくよりとうべゑさてこそとすりよつておかくしあるなごらうにんたしかにあかぼりみつゑもんしゆじんのかたきとつめよれバよしたかあみがさとつてうたがはしくハめんでいとつくと見ておけといふにとうべゑよしたかのかほつくぐとうちまもりこハよしたかこうにてましますか人ちがひのぶれいまつびらごめんとわびけれバよしたかふしんのがんしよくにて人たがへハゆるしくれんがなにゆへそれがしのなをしつたるぞとたづねにとうべゑこゑをひそめそれがしがしゆじんといふハもとよしなかこうのけらいなりしがかまくらへきたり大江けにほうこうなせしがどうかちうあかぼりみづゑもんにうたれしゆへしうぐかたきをたづねあるく也もときそにつかへしゆへこしうなれバよしたかこうをぞんじ

てをる也とへいふくしておそれいるよしたかハとうべゑちうぎのようすをとつくと見てしうのかたきをうたうと思ひてちうぎにこつたるそのたましい人ちがひハゆるすずいぶんかたきをたづねよしかりよりも上らくのやうすハきかざるかとたづねられ「されバよりともこのご上らくいよくきんく」とときはまりしよだいみやうがたもおひくかまくらをおたちのようすに見へるなりとかたれハうなづきまつこのところにてわかれんととうべゑハよしたかにれいぎをのべてなんでもこれからさいこくすじとあしにまかせてはしりゆくちうぎのしもべハいそぎあしあとからよしたかゆうくとしあんにむねもくれちかくなりけれバわがすむかたへたちかへりつくぐとしあんして思ふやういよく上らくにときはまりたるよしなれバみやこへいそぐかちかみち也とそのよのうちによういしてよあけて又もたびよいとうかいどうをいそぎしがあさはやくよりしゆつたつしてやにはにはしりてよあけがたにはやくも せき のぢぎうだうへきたりまづトやすみとぢぎうだうへあがりてあしをやすめんものとしばしこへやすみていたるをりからにこのしゆくになのたかき小まん ▲といふおじやれとしハまだはたちばかり

つきへ

(廿二丁裏・廿三丁表)

つゞき と見へなにかぐわんごめあつてこのぢぎうそんへさんけいのやうすにてどうのうちへはいりなみだをながしふしをがみくて

又／＼だうをいづるをりふし二十五六の人がらよき男とゆきちがひてかほ見あはせ「あにさんか「ヲ、いもうとかこのあいだから思ふてゐたがいろ／＼きのむしやくしやで あはぬが たのんでおいたかねハいかどなつたとたづぬれば 小まんハふところより かねをとりだしやう／＼の事で おまへのたのみ三千両のかねハとゝのふたれど はゝまハこびやうきのくすりのあたひハこれでハおまにあいませぬかといふに「へいじハかほあげてかたじけない／＼さりながら こんどの はゝのやまひハたゞごとならず これにハやがらといふさかなをとつてこのきもにこんじてのむくすりでなければ ならざることゆへ そのやがらといふをハあこきがうらでなければいゆへ きんだんのぼとしりながら よるしのでゆきしに うみのなかに ひかりものが見ゆるゆへこれハてんとうさまが おやにかう／＼をめぐみてをしへてくださると思ひあみをうつて ひきあげみれば ▲やがらのうをでハなくて これ見や このやうなけつこうなつるぎがあみのなかへはいつて あがつたハいの あとをまた うちこまふと思ふたが 人がくるやうすゆへ▲そう／＼にげかへつたが やがらのうをがなければならず またくすりハあれど ひやくりやうとやらでなければもとめられぬと いしやのはなしなか／＼身ひんないまのせたい 百両ハさておき ぜに百さいちつとにハできかねると きやうだいふたりのはなしのようす ▲よしたかといふときゝすまし どのうちより そろ／＼でゝ二人のまへにきたりい まお二人の ☒ はなしをきけば はゝこの なんびやうのようすくすりのあたへにさしつかへしとハきのどくせんばん きゝ申して 百両のか

ね おかし申す つかはれよと かね一トつゝみさしいだせハ二人リハびつくり へいじハ手をつきまことにありがたきおほせなれど 大まいの かね おかり申ても かへす手だてもござりませぬと 二人のじたいによしたかゝ なにさ／＼ おかへしなざるにおよばず そのかはりに そのもとにさづかりし ござよじのつるぎを このほうへ うつてくださるまいかと たのみに ☒ へいじハもつたるつるぎをさしいだし おゝくのかねをおかしくくださるごしんせつ なにしに いなまん さアさしあげませうといひければ よしたか とつてうちまもり／＼ これぞ せんねんうせさせ給ふ とつかのほうけん かたじけなはずいぶん はゝこのびやうきの やうぜう それで たりずバ 又せう／＼と なげだすかねハ 又一トつゝ みきやうだいふたりハありがたなみだ ぶれいハかさねて／＼と よろこびわがやへたちかへる あとによしたか つるぎを見やり さんじゆの じんぎのその一ツ とつかのぎよけん手にいるうへハ きんていへさしあげ それをこうによりとも うちとる いんせんを申うけん と心にうなづき ゆう／＼と たどりたどりて あゆみゆくされバ よしたかいよ／＼よりとも 上らくのさたゆへ かねて ☒ ふくしんのみかたに ねのいのこや太のおとゝ ねのいてうきちといふものを みやこへおきて らくちうのやうすをさぐらせしに このてう吉 みやこにて 町人となり おびやてう右エ門とあらためて てうかにて あきなひして らくちうらくぐわいの つぎ

(廿三丁裏・廿四丁表)

つゞき ようすをきゝたゞしいたるところにいせきんぐうのかへり
 にとりのいへにこけがらしにてしなのやのおほんといふむすめに
みなくち にてゆきあひみちづれとなりそのよはいつしよになりて
いしべ のはたごやにとまりしにそのよ思はずかのむすめおほん
 わりなきぎりをなしきやうとへかへりてもおほんへてう右工門の
 ことのまいひくらしつひに身もちとなりしをばおやこれをしらず
 そうおうのかたへゑんぐみせんとせしをおほんへてう右工門と
 なじみかさなればよめいりもなしがたくあるよてう右工門とぬけい
 で、かつら川へ身なげあひはてしとなんよしたかハこのことゆめに
 もしられバ身のうへくわしくしたゝめかねてふくしんのてう吉な
 れバひきやくのたよりに手が見つかはせしにおびやのかないハなに
 ごとやらんとてう右工門あいはてゝとりこみゆへいへぬしへその手
 がみを見せければいへぬしハこれをよんでびつくりなしこれハ大それ
 たむほん人なりさてハこのやのてう吉ハもとハぶしにてきそのざんと
 うとはじめてしりこういふことならとくよりおかみへそにんして
 ほうびのかねをせしめたものとよくしんおこりいつそこの手がみ
 をもつてうつたへんとすぐにだいくわんしよへ手がみもちいでそに
 んなすゆゑぶぎやうしよにもさつそくとりあげよんで見ればよした
 かきそのざんとうをあつめよしなかのとむらひがつせんに上らくを
 さいはひによりともをうちとらんとのたくみにてそのあいずりねの
 いてう吉といふハおびやてう右工門なればぶぎやうしよのやくにん

大きにおどろきそのてがみをすぐさまきやうとのやくにんぢうへ申
 ながしひやうぢやうのうへにてあふみのくにゝしのびあるしみづの
 くわんじやよしたかをからめとらんとひそかにうつてをさしむけけ
 るまたよしたかハたよりなきゆへない／＼人をもつておびやのやう
 すをきゝしにあひはてたるよしゆへ大きにおどろきさてハわが申シ
 つかはしたる手がみ▲人手にわたりろけんなしたりしからバこの
 あたりへうつてのものきたるべしすみかをかへんとてそれよりみや
 こへほど▲ちかきこすいのほとりへおもむかんと身をかため☒
 すはうつてのものきたらバみなころしにせんとその身のようじんなし
 てしのび／＼にこすいきんへんにはいくわいせしがちゝ☒よしな
 かのぶつじおこたりしがさいはひあはづのはらにちかければつかの
 ほどりにいたりゑかうせんものと**くさつ**をすぎてあはづがはらの
 つかのほとりへまいりてみづをたむけなむちゝそんれいぶつくわぼ
 だいとがつせうしてゑこうにときをうつしければふしぎやあたり
 めいどうしてごりんのせきとうばら／＼とくだけどちうよりあらは
 れしハきそよしなかかつちうの(脱文あるカ)ならぬゆうびのでたちよしたかを
 さしまねぎいかにくわんじやそのほうわがついせんによりともを
 うちほろぼさんといくさのくはだてなすといへどもめいけんつるぎ
 ハもとむれどなくてかなはぬものぐなしわれさいはひにうちじ
 へのりまできたるところのよろひをいまなんじへあたふるほどに
 ▲このよろひをちやくしてかつせんせよトひおどしのよろひを給は
 りけるによしたかとつておそれうやまひハ、アありがたし／＼と

手にとりあげ いまにしゆらのごむねんをはら(し)申さん こゝろやす
 かけ(つぎ)

(廿四丁裏・廿五丁表)

〔つぎ〕 ちゝうへと いふかと思へバゆめさめて あはづののべの つぢ
 どうに うたゝねのまへにありしハ ゆめのうち よしなかに給はりしよ
 ろひあれバ こハくふしぎさてハまたゆめありがたしと よろひをこ
 わきにひつかゝへみやこへいらんに このまゝにて しゆびあししすが
 たをかへんにハかねて 〔大つ〕 おひわけに としふるくすまふとさのせ
 うげんのでし また平とハじゆこんなれば かのまた平がたくへたより
 ゆきしが このまた平 せうちきなるものにて このほどより きんていの
 急どころとなり 大うちへでいりするよしなれば かけをたのみぎつし
 やうとなつて きんちうへいりこみしが ひとなきをうかどひくげのひ
 とりさんだいするをひつとらへ しめころし しやうぞくかむりをはぎ
 とり いざや みかどのごさちかくしのびより せきにて手にいりしと
 つかのほうけんをおとりにりうがんを ▲はいしわがぞんねんの一
 とふりをうちあげ よりともついでいんぜんをこひうけん と ひそか
 にようすうかどふところにはやくも かまくらにハ よしなかのちやく
 ししみづのくわんじや 上らくをさいはひ よりともを つけねらふとの
 ふうぶん みやこのうちにかくれなれば きんちうのしゆごちゝぶの
 しがたどけ給はり よしたかと見るならば かんげんして こゝろひる
 かへさせ かまくらのみかたへ まねかんものと せんぎまぢくなるこ

とよしたかすこしも しらぎるゆゑひそかにくげのすがたとなりひ
 としれずも ふてぎのたましい なにおそれんけしきもなく みかどにち
 かよらバおもふねがひのくもはれんと しづくあゆむだいのけつこ
 うこれぞ 〔京〕との大だいいりしのびゆかんとゆくところをちゝぶのし
 げたど 急かけて ヤアくよしたか およばぬむほんをおこさんより
 こうさんして かまくらのばつかにつけば よしなかのついでんくやうに
 まさるのどうり いまより心ひるがへし よりともこうへ ほうこうめさ
 れしげたどとりもちいたさんと きくより よしたかさてハ わがいり
 こみしをしつたるうへハ かたつばしからきりたをし いさぎよくせ
 つぶくする 〔印へつづく〕

(廿六丁裏・廿七丁表)

〔印より〕 さアこい せうぶと かたなのつかに手をかくれば しげたど
 しばしとこゑをかけ ヤレはやまり給ふな ▲よしたか公 おなじげんけ
 のちやくりうをなにしに手むかひ申べしたどこのまゝにおくものゝ
 きその御たね 心あらバナがくかまくらへ ほうこうすゝめて ゆうし
 のちすじをのこさんためいかにくといひけるにぞ よしたかにつこ
 とうちわらひ よりともほこうとハけがらはししさりながらさま
 でなさけのちゝぶの ▲しげたど われこれまで こゝろをつくして身
 をしのびしも 父よしなかの あだをほうぜんためながら いまくおも
 へバ いったん みかどへたいしわがまゝなしたる ちゝよしなかゆへ
 ぎりをしつて よりともが うつてをよせし あはづのかつせん きんてい

へのいひわけハふしぎと手にいるとつかのほうけんたゞいまなんじへ
つかはすあひだちよしなかなど 身のいひわけ みかどへたのむと
たいせし つるぎをわたせばとつて しげたどか つるぎだいらへもと
らせたまふハきそのたいこう われハこのま々 ▲ よしたかどこうを見
のがしかつてしだいにらくちうをはなしがいい このばハこのま々とい
ふによしたか いさみたちいふにやおよぶ またかさねての さんく
わいにハよともがかうべをはねんさらばと しげたど よしたか
わかれてかへる おほうちやまめでたきためし ひさしけり

(廿七丁裏)

○江戸より五十三次の長語り 目出たく打出し

まづこのそうしハこれぎり

「ひやうばん たのむぞ ひやうばんじやく

まちぢう すみぐ 二ひやうばん

たのむぞく たのみます

並木作

國貞画

板元三鉄

癸丑初春

京四条れん中

しん板



注

- (1) 「五十三次」の浮世絵に関しては、吉田暎二『浮世絵事典』中巻(定本、昭和四十九年、画文堂)「東海道五十三次」の項参照。また、保栄堂板「東海道五拾三次」は、鈴木重三・大久保純一・木村八重子編「保永堂版 広重東海道五拾三次」(二〇〇四年、岩波書店)参照。
- (2) 『三代豊国・初代広重 双筆五十三次』(謎解き浮世絵叢書、平成二十三年、二女社)所収。
- (3) 新藤茂「当館所蔵『役者』見立東海道五十三次」について(抄)、『平成17年度研究成果報告 近世文芸の表現技法(見たて・やつし)』の総合的研究プロジェクト報告書』第2号(平成十八年、国文学研究資料館)参照。
- (4) 『鶴屋南北全集』第十二巻(一九七四年、三一書房)所収。

(5) 『梅初春五十三驛』(未翻刻戯曲集14、平成十九年、日本芸術文化振興会)、
『通し梅初春五十三驛』(国立劇場上演資料集四九七、平成十九年、日本芸術
文化振興会) 参照。

(6) この「鍛打」およびその資料に関しては、小池章太郎氏の「教示を得た。

(7) 佐藤悟『正本写合巻年表(正本写合巻集別冊)』(二〇一一、日本芸術文化
振興会)。現在、国立劇場調査養成部編の「正本写合巻集」が刊行中である。

【補記】本稿は、平成二十四年度の国内留学による研究調査成果である。なお、
東京大学附属図書館より翻刻および掲載許可をいただいた。また資料の閲
覧にあたり、東京大学総合図書館、東京女子大学図書館のお世話になった。
併せ御礼申し上げたい。